曇鸞教學の特色

石橋誠道

一、慧遠慈愍の淨土教義

印度の事は暫くおき、淨土教が支那で行はれたのは頗る早い時代であつた。その最も早いところでは西晉の彌天の道安が淨土論を著はしたと言はれてあるが、今その書籍が傳はらないから、どの程度まで淨土教を信じつゝあつたか又如何樣な教義であつたかは殆んど解らない。寧ろ現今殘されてある史料に依れば、道安は兜率往生の主張者であつたように思はれる。但し大正大藏經の八拾五卷に、道安法師念佛讃並に道安法師念佛讃文と云ふ短篇二編が收められてあるが、充分に其教義を知ることが出來ない。

道安に次で多くの念佛者があつたらしいが、今現に史傳に傳へられてある有名な人は卽ち僧顯や慧遠である。僧顯は慧遠よりも先輩で、西晉の末に江東に於て念佛を修した人であるが是又委しい史實を知ることが出來ない。仍て今は暫く慧遠の念佛を略辨し、而して曇鸞の特色を述べたいと思ふ。

大體に於て支那に於ける初期の佛教は、何れも印度其儘の氣風を承けて、戒定慧の三學を重んじたから、どの高僧もみな戒律を尊重したが、特に慧遠に至つてはこの點が特に嚴重であつた。慧遠は立派な人格者で、古今稀に見る高

僧であつた。慧遠の人格の高潔な事は何れの點にも顯はれておるが、特に左に掲ぐる彼れの傳記の一節は最も明かにそれを物語るものである。

慧遠八十三歳の時、病漸く重くしてまさに終らんとするに當つて、門弟がそれを悲んで豉酒(豆と鹽とで作つた酒)を進めて病を治せんことを請ふた。その時慧遠は、律の中に之を許さないからとて斷つた。そこで米汁を飲んで下さいと願つた。慧遠は既に日中を過ぎたから、それを食べてはいけないと斷つた。仍て蜜に水をまぜて飲んで下さいと賴んだ。この時慧遠は門弟をして律文を開いて、それがよいか惡いかを尋ねさせたが、未だ律文の全部を調べ終ることの出來ない間に慧遠は靜かに遷化されたと記されてある。又病間に遺誡して、我れ若し命が終つたならば決して土中に埋めてはならない、遺骸を松林の間に捨てて、以て饑たる鳥獸に與へよと言はれたが、さすがに門弟も情に忍びず、終に厚く葬つて塔を建てたと云ふことである。

此等の記事を見る時に、如何に慧遠が卓越せる人格の人であつたかは想像に餘りあるものと思う。余はこゝに自ら我が渡邊先生の高風を思ひ出さずにはゐられない。渡邊先生は重病の時、最も親しい友人の一人中野文太郎博士に書面を與へて、若し余が死んだその後で、私の體が學界の爲に何等かの役に立つならば、決して遠慮することはない、解剖に付して貰いたいとの遺言であつたので、中野博士は大學で之を解剖して、大に發明する所があり學界に貢獻したと云ふことである。話が大變横道にそれたが、再び本筋に戻つて述べよう。

宗祖は選擇集の始に於て、支那の淨土敎には三流あることを明された。卽ち慧遠と善導と慈愍三藏との三流であるが、此の三流には各々の特異な點がある。更らに宋朝以後に於ては、天台と念佛と融合した台淨一致の念佛もあり、淨土と禪宗と一致した禪淨一致の淨土敎もある。その他華嚴、律、唯識等の立場から念佛を修した人もあつて、支那では念佛が各方面に進入しつゝあつたのであるが、その中まづ慧遠の念佛の要領を述べて、曇鸞に移りたいと思う。

慧遠の師である道安は最も熱心な般若の研究者であつたが、其の弟子である慧遠も亦た、般若皆空の思想に深く通達した人であつた。それ故に空の思想が慧遠の念佛の根據となつたことは爭はれない。然るにこの空の思想を充分に證得せんとすれば自ら戒定慧の三學が必要である。慧遠が諸國を遊歷した後、遂に廬山を選定して其居を定めたことも固より靜寂の處に安住して、以て戒定を滿足せんと企てたからであつた。卽ち戒に依て定を起し、定に依つて智慧を生じ、智慧に依つて空を證り、空に依つて又一切を知るのであつて、此れが卽ち寂にして而かも照の心である。卽ち念佛することに依て心自ら寂靜となり、寂靜に依て又一切を知り、遂に自然に見佛することが出來るのである。これが卽ち念佛三昧であると考へたのであつた。故に慧遠の念佛三昧詩序に云く、

念佛三昧とは何ぞや。思ひ專らにして(定)、想寂(三昧)するの謂なり。思ひ專らなれば、志一にして撓まず。想寂すれば、則ち氣虛にして神朗らかなり。氣虛なれば則ち智その照を恬ひ(恬は養ふ意)、神朗かなれば則ち幽として徹せざるなし。この二は乃ち是れ自然の玄府、一に會して用を致す。是の故に、靖思(心を靜肅にすること)閑宇(邪心を除き去ること)にして物に感じ靈に通じ心を御すること唯だ正しく、動いて微に入る。(中略)自然に玄音の叩くを察して心に聽けば(自分の申す念佛の聲を心に聞いて沈思すること)則ち塵累每に消えて(煩惱の罪が常に消ゆ)、滯情融朗なり(惡念忽ち失せて善き朗かなる心となる)

と言はれてある。故に慧遠の念佛は善行を修し(戒)、善念に住し(定)、善智を得て(慧)、三昧を發得し、見佛して往生するのが目的であつたことは明かである。是れが卽ち念佛三昧である。故に慧遠の傳記にも、入山の後十一年の間に、三たび聖相(阿彌陀佛)を見たと言はれてある。大體に於て慧遠の念佛は、觀佛的の念佛であつて、散心口稱の念佛ではなかつた。この點が曇鸞の念佛とやゝ異る所である。卽ち未だ本願口稱の念佛に徹底せられなかつたからである。そは恐くは未だ天親の往生論が傳はらなかつた爲に、それを見ることが出來なかつたのと、十住毘婆沙論は當時

傳はつてゐたらしいが、慧遠が果してそれを見たか見ないかは問題である。更らに無量壽經等は讀誦されたと思はるゝが、本願の意義を充分に解せられなかつたではなからうか。これらの事情は慧遠をして、本願口稱の念佛を解する餘地を與へなかつたからであらう。

而してこゝに愍慈三藏の念佛に就て、一言附け加へておきたいことは、慈愍三藏は善導よりも後輩で、勿論曇鸞との關係は少いが、然し慈愍の念佛も、亦た慧遠の念佛に同じく、三學に重點がおかれてあるようだ。勿論善導よりも後輩で善導の影響は多大であるから、一面に於ては善導流に似た所もあり、勿論本願の念佛を主張したが、又一面には多年印度に遊學して、その僧風を見聞し、三學を重じた所から持戒誦經が最も稱讃されてある。故に先年發見せられた略諸經論念佛法門往生淨土集卷上(一名慈悲集)には、

若し能く廻向して淨土に願生せんとする者は、身を端ふして正しく西方淨土に向ひ、心を彼の阿彌陀佛に繫けて、念々相續して彼の名號を稱へ、行住坐臥、常に稱念すべし、兼て觀世音菩薩を念じ、觀無量壽經、及び阿彌陀經を誦すること毎日一遍せよ。酒肉熏辛、死を以て期となし、斷じて食せず、藥分も通ぜず、齋戒を奉持し、三業を淸淨にし、念佛誦經して、廻向して上品上生を願求せよ、此の一形を盡して、必定して往生す。云云

と言はれてある。慈愍三藏の慈悲集の上卷に依るに、この慈悲集は三卷あつて、第一卷は先づ異見を叙し、教及び理を以て逐遣してその非を知らしめ。第二卷は廣く聖教を引いて、淨土念佛の正宗を成立し。第三卷は諸教古今の疑滯を會釋し、諸行出離の遲疾を校量すと言はれてあるから、此の慈悲集が傳はれば教義の大要が解るであらうが、不幸にして第二第三卷が失はれたので、その教義の全體を知ることは出來ないのは遺憾である。然しながらかの上卷の文から察すれば、慈愍は上品の往生を目標とし、持戒念佛誦經を奬勵したことは明らかである。これらの點は又慧遠と

も異り、曇鸞ともやゝ相異するものである。

二、曇鸞教學の特異性

前述の如く慧遠慈愍等は、何れも戒定慧の三學を重んじた結果、一面には本願の念佛を主張すると同時に、又一面にはこの三學は必ず實行しなくてはならない、即ちこれを怠つてはならないと勸められたから、この三學が往生の要件となつて居つたことは言ふまでもない。即ち上品上生を目標とする教義であつた。慧遠の教義にはその意味が明瞭に顯はれてはゐないが、慈愍の教義には明白にそれが顯はれておる。然るに曇鸞の教義の中には三學を往生の要件とする意味は、殆んど何處にも顯はれてなく、唯だ他力を賴む本願を仰ぐと云ふ思想が最も强調されてある。故に論註の始に於て龍樹菩薩の十住毘婆沙論を引て云く、

菩薩阿毘跋致を求るに二種の道あり、一には難行道、二には易行道なり。難行道とは謂く五濁の世無佛の時に於て、阿毘跋致を求むるを難となす。この難に多途あり粗ぼ五三を言て以て義意を示さん。一には外道の相善菩薩の法を亂る。二には聲聞の自利大慈悲を障ふ。三には無顧の惡人他の勝德を破す。四には顚倒の善果能く梵行を壞す。五には唯だ是れ自力にして他力の持なし。斯の如き等の事目に觸れて皆な是れなり、譬へば陸路の步行は則ち苦しきが如し。易行道とは謂く但だ信佛の因緣を以て淨土に生ぜんと願ずれば、佛の願力に乘じて便ち彼の淸淨の土に往生することを得る。佛力住持して即ち大乘正定の聚に入る。正定とは則ち是れ阿毘跋致なり、譬へば水路の乘船は即ち樂しきが如し。

と言はれてある。この中他力と云ふ言、或は信佛の因緣、佛の本願に乘ず、佛力住持して等の言は、最も注意を要するもので、曇鸞に至つて始てこの他力の思想が最も明かに顯はされた。即ち阿彌陀佛の大願業力に依て往生することが其れが他力であると云ふ思想を最も明白に說き顯はされたのである。故にこの意味の文句は鸞師の著書には何處

にも常に顯はれてをる。今その二三の文を出せば曇鸞の讃阿彌陀佛の偈に云く、

阿彌陀佛の諸の德號を聞て、信心歡喜して聞く所を慶ふ。乃ち一念至心の者に暨ぶまで、回向して生れんと願ずれば、皆な生ずることを得る。

と。又云く、

若し阿彌陀佛の號を聞て、歡喜讃仰し、心に歸依すれば、下も一念に至るまで大利を得る、則ち功德の寶を具足せりとなす。

と。又云く、

神力本願及び滿足せる明了堅固究竟の願、慈悲方便稱す可らず、眞無量(阿彌陀佛)に歸命し稽首し奉る。(以上讃阿彌陀佛偈)

又論註の中にも諸處に本願の義が明かされてある。今その一二を示せば論註の上卷に云く、

安樂は是れ菩薩の慈悲正觀の由より生じ、如來の神力本願の建る所なり。胎卵濕生茲に緣つて高く揖し(往生すること)業繫の長維(生死流轉のこと)此に從て永く斷ず。

と。又同下卷に云く、

凡そ是れ彼の淨土に生ずると、及び彼の菩薩人天の起す所の諸行とは、皆な阿彌陀如來の本願力に緣るが故なり、何となれば若し佛力に非ずんば四十八願は便ち是れ徒らに設るならん。今的(明)かに三願を取て用て義意を證せん。願に云く、設し我れ佛を得たらんに、十方の衆生至心に信樂して、我が國に生ぜんと欲して、乃至十念せんに若し生ぜずんば正覺を取らず、唯だ五逆にして正法を誹謗するをば除く、佛の願力に緣るが故に、十念の念佛を以て往生を得るなり。往生を得るが故に三界輪轉の事を免ると。(下略)

これらは曇鸞が本願他力の往生を最も强調せられた明文であるが、大體に於て曇鸞は、天親菩薩の往生論の思想に依て五念門を以て往生の正行とされた。然しながらその中で、特に本願の念佛に重點をおかれたことを見逃してはな

らない。即ち天親は往生論に於て、五念門を以て往生の行因とせられたが、その中特に觀察に重點をおかれたことは明かである。故にこの論の始に云く、此の願偈には何かなる義を明かせるや、曰く彼の安樂世界を觀じて阿彌陀如來を見奉り、彼の國に生ぜんと願ずることを示現すと云ひ、又五念門を往相と還相との二門に分ち、初の四門を往相となし、後の一門を還相となす。その中觀察を第四門となし往相の中の最後とせられたこと、及びこの論の中觀察門が最も委しく說明せられ、殆んどこの論の大部分が觀察を以て埋められてあること等から考へて、天親は觀察に重點をおかれたことは明かである。

然るに曇鸞は之に異り、本願の念佛に最も重點をおいて之の論を解釋された。この點も亦た大に注意を要する點である。故に曇鸞は論註の始に龍樹の十住毘婆沙論を引いて本願他力易行の旨を明かし、更らに其の下に大經の中心本願念佛の義を明かして「無量壽とは是れ安樂淨土の如來の別號なり、釋迦牟尼佛、王舍城（大經の說處）及び舍衞國に（阿彌陀經の說處）在まして、大衆の中に於て無量壽佛の莊嚴功德を說き給ふに、即ち佛の名號を以て經體となし給へり」と釋せられてある。即ち曇鸞の考に依れば無量壽經並に阿彌陀經の中心は全く本願の念佛である、他力易行が中心である。然ればこの論も無量壽經の論なればその中心の念佛を釋し出さねばならぬと云ふ考へから斯樣に解釋されたことであらう。即ち曇鸞に由て始めて大經の本願の意味が徹底的に社會に紹介されたのである。斯樣に曇鸞が大經の眞意を探り、彌陀の本懷本願を明かにし、他力易行を强調せられたから、こゝに全く自力の三學の必要を認めず、唯だ念佛の一行に足ると云ふ思想が明白に顯はれて來たのである。故に曇鸞の著書の中には前にも既に述べた如く、一念十念の往生が幾度も明されてあり、論註の上卷の終には、十念業成の說が述べられてある。即ち唯だ十念の念佛

の力に依て往生の業が成就すると云ふことが明かされてある。從つて之れが我宗に於ける傳法にまで取り入れられて、凝思十念の傳として用ひられた。是の如く曇鸞が、大經の眞意、本願の眞相を洞察して道綽善導の教義の根幹となつたことは、支那淨土教史上に於ける一大發見であり、否な佛教史の上に於て他力の一門を開出した、最も初の偉人であつたことを忘れてはならぬ。故に支那淨土教の中に於て、この一流が最も隆盛を極めたのみならず、我國に於ける淨土門徒は、皆なこの流れを汲むものである。今この曇鸞の遠忌に際し、益々その德の高く且つ深きことを稱讃せずにはゐられない。